初めてのチャレンジ！今年こそチャレンジ！

募集！

2018年度 第9回

学生チャレンジ企画

初めてのチャレンジ！
今年こそチャレンジ！

社会貢献、国際交流、大学の活性化など、
学生の取り組みを大学が応援し、サポートする制度です。

募集期間 4月上旬～5月 ※昨年度より募集期間が短くなります。

応募資格 本学に在籍する学生（大学院生、別科生含む）のグループ

採　用 6件程度を予定（企画に応じて奨励金が支給されます）

※応募方法などの詳細は4月にホームページにて発表します。

主催：総合企画部　学生部

お問い合わせ先
文京キャンパス
広報室
TEL.03-3947-7160
E-Mail : web_pub@ofc.takushoku-u.ac.jp

拓殖大学
Takushoku University

2017年度
第8回

学生チャレンジ企画
実施報告書

2020 TAKUSHOKU NEW ORANGE PROJECT
拓殖大学は創立120周年を迎えます

P3 エンターテイナーから学ぶ
社会人基礎力向上プロジェクト
鄭偉ゼミナール チーム3年

P5 How to Hunt a job in Japan!
～動画で伝える外国人留学生のための
日本就活成功戦略ガイド～
英米語学科 藤本ゼミナール

P7 2018年度
八王子市観光ブックプロジェクト
関口ゼミナール

P9 ミュージックビデオで伝えるアフリカ
～アフリカの子供達から
拓大生と日本人が学ぶこと～
拓殖大学アフリカ研究愛好会

P11 郷土料理を活用した
地域ブランド創生プロジェクト
徳永ゼミナールおよび
デザイン学科チーム

学生チャレンジ企画は創立110周年を記念して、2010年にスタートしました。この取り組みは社会貢献、国際交流、大学の活性化などにつながる活動を積極的に行っている学生をサポートするものです。第8回となる2017年度は、23件の応募があり、書類選考及びプレゼンテーション選考の結果、5件の企画が優秀企画に選ばれました。

この実施報告書は、採択された企画を実行した学生たちの約1年間にわたる活動の集大成です。ぜひ、拓大生のチャレンジ精神に触れてみてください。

スケジュール

ホームページ
HPオープンと連動して学内に募集告知ポスターを掲示しました。

5団体が優秀企画として採択され、HPで発表がありました。

活動の成果を報告しグランプリ、準グランプリが決定しました。

4.27(木)▼6.2(金)	6.16(金)	6.24(土)	6.28(水)	7.1(土)	12.2(土)	3月
募集期間	第一次書類選考発表	第二次プレゼン審査	選考結果発表	奨励金授与式	成果報告発表会	最終報告

プレゼンテーションの様子
応募全23件のうち10件が第二次プレゼン審査に進みました。

奨励金授与式
各団体の代表者が活動への決意表明をしました。

活動の集大成である報告書を作成し今年度のすべての活動を終えました。

講評 学生チャレンジ企画を終えて

拓殖大学副学長　学生チャレンジ企画実行委員長　芦田　誠

学生チャレンジ企画は、社会貢献、国際交流、大学の活性化などの分野で活動する学生を支援するため、拓殖大学創立110周年記念事業の一環として2010年にスタートし、以後毎年多くの取り組みが行われてきました。

2017年度は前年度と同様に過去最高の23件の応募があり、第1次選考の書類審査と第2次選考のプレゼンテーションを経て、最終的に5件のプロジェクトが採択されました。勝ち残った5団体は必要経費によって10万～25万円と奨励金に差がつきましたが、内容的にはいずれも大きな成果が期待されるものばかりでした。

本報告書は、今年度採択された5企画のＰＤＣＡサイクル、具体的には実施スケジュール、実施内容と成果、収支報告、反省点を示したものです。

まず注目されるのが成果ですが、採択プロジェクトの成果については昨年度から可視化を図り2017年12月2日に成果報告発表会を開催いたしました。5団体のプレゼンテーションはいずれもレベルが高く甲乙つけがたいものでしたが、日本とウガンダの小学生の橋渡し役を行ったチャレンジ精神とマネジメント力が評価され、「ミュージックビデオで伝えるアフリカ」プロジェクトがグランプリを獲得しました。また、準グランプリには「みみ」の新レシピを考案し富士川町の地方創生に貢献された「郷土料理を活用した地域ブランド創生プロジェクト」が受賞されました。2つの企画はもちろんのこと、精力的に活動された5団体の皆さん、本当にご苦労様でした。この体験が必ずや皆さんの将来にとって貴重な財産になっていくものと確信いたします。

いま一つ反省点も注目されます。企画の認知度、要員不足、メンバーの参加意識、下調べ、相手との調整不足、撮影技術の未熟さ、想定外の事態への対応などの反省点が挙げられています。

「失敗しない者は、つねに何事もなしえない」と語ったのはアメリカの国際法学者フェルプスです。失敗を恐れずアクションを起こすことが重要で、たとえ結果がパーフェクトでなくとも実体験から学ぶことも多いと考えます。例えば、情報の共有やグループの結束力、予期せぬ問題に対して対処方法を考え抜く力、綿密な下準備や打ち合わせ、PRの重要性等を理解し、今後の大学における知の練磨や、やがて始まる就職活動に生かしていただければ学チャレの目的は十分果たすことができたと考えます。本企画の経験を今後に生かすことも重要です。

お陰さまで、今年度も学生チャレンジ企画を盛会裏に終了することができました。これも偏に学生を指導して頂いた指導教授の先生方、また企画を積極的に受け入れて頂いた行政機関、企業、各種団体のお陰と深く感謝しております。この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

結びに、本報告書をご覧いただき、学生チャレンジ企画がもつ意義を理解し、次年度へのチャレンジにつなげて頂ければうれしく思います。

初めてのチャレンジ!
今年こそチャレンジ!

エンターテイナーから学ぶ 社会人基礎力向上プロジェクト

団体名 **鄭偉ゼミナール チーム3年**
代表者 商学部 国際ビジネス学科 3年 辻 拓巳
参加メンバー人数 11名

実施スケジュール

2017年5月22日～10月21日

5月22日	学生チャレンジ企画内容決定
5月26日	鄭先生と打ち合わせ
5月29日	メンバー会議 → 集客の方法の提案 ワークショップの方向性・内容の話し合い
6月12日	メンバー会議 → 全4回ワークショップの担当決め
6月17日	講師と打ち合わせ → 第4回ワークショップ内容の話し合い 集客案の提案
6月19日	メンバー会議 → 第1、2回ワークショップ内容の話し合い 集客を行う場所の提案
6月26日	メンバー会議 → 第2回ワークショップ内容の話し合い 集客を行う場所の提案
7月3日	メンバー会議 → 第2、3回ワークショップ内容話し合い 打ち合わせや準備を円滑に進めるためチーム作り 集客を行う場所の最終確認
7月10日	メンバー会議 → 新たな集客方法準備や段取りの確認 第4回ワークショップ内容確認
7月17日	撮影機材下見
7月19日	第三回紅陵祭参加団体説明会参加
7月24日	メンバー会議 → 全4回ワークショップ内容確認
8月25日	講師との打ち合わせ → 3回までのワークショップ内容確認、4回目の落語披露の会場説明
8月30日	撮影機材下見 → 見積もり出し
9月2日	第四回紅陵祭参加団体説明会参加
9月11日	各班代表による打ち合わせ → 各班活動報告、ワークショップ内容確認、実施教室の確保
9月18日	メンバー会議 → 第1回ワークショップ内容の最終確認、集客状況の確認
9月22日	撮影機材、編集ソフトの購入
9月23日	第五回紅陵祭参加団体説明会参加
9月25日	第1回ワークショップ実施 17時～18時 E館9階ラウンジ 参加者10人
	落語研究会OB会長、副会長、古今亭志ん彌さんと打ち合わせ → 1回目ワークショップのフィードバック、第2回目以降の内容確認
10月2日	第2回ワークショップ実施 18時～19時 E館9階ラウンジ 参加者15人
	メンバー会議 → 集客、改善点の確認と改善案の提案、第3回内容最終確認
10月9日	第3回ワークショップ実施 18時～19時 E館9階ラウンジ 参加者23人
	メンバー会議 → 集客、改善点の確認と改善案の提案、第4回内容最終確認
10月13日	講師と打ち合わせ → 4回目ワークショップの最終打ち合わせ 当日披露していただく落語の台本の受け取り
10月21日	第4回ワークショップ実施 13時30分～14時30分 E701教室 参加者68人
	アンケート取りまとめ

実施内容・成果

第1回ワークショップ
「自分のことを正しく伝えよう」
講師：古今亭志ん彌氏／細田 家永氏

講師として古今亭志ん彌さんと細田家永さんをお迎えし、マインドマップを使用したワークショップを開催した。まず始めに、マインドマップを使用せずに1分間の自己紹介をした。その後マインドマップを作成し、それを使い同じように1分間自己紹介をした。それぞれを比較してみると1回目では30秒ほどで終わっていた自己紹介が、2回目では1分では足りないほど内容の濃いものになった。講師からは、短い時間で充実した内容が伝えられるかが社会に出てからは重要であり、身振りや言葉遣いを工夫することにより今後の生活において役に立つものになると学んだ。また、実際にマインドマップを使用して自己紹介をし話す順序や内容の重要性についてどこを基準に自己紹介すると濃いものにするのか落語に例えながらフィードバックをしていただいた。

第1回ワークショップYouTube配信URL
https://m.youtube.com/watch?v=yI0DalYtVUc

第2回ワークショップ
「言葉を使わないで伝えよう」
講師：細田 家永氏

表情やボディーランゲージを使用した非言語コミュニケーションを学ぶワークショップを開催した。落語では表情や動作で思っている事を伝えることが多く、講師にまんだら（手拭い）を使った表現を披露していただいた。その後、紙で目から下を隠しどのような表情をしているか当てるペアワークやお題をジェスチャーで伝えるシュチュエーションジェスチャーゲームを6人チームのリレー形式で実施した。講師からは、相手に自分の意思を伝えるには言葉だけではなく体で表現することが、何よりも大切な挨拶でよい印象が与えられるというフィードバックをしていただいた。

第1回ワークショップ風景
ワークショップ内容の説明を受ける様子

第2回ワークショップYouTube配信URL
https://m.youtube.com/watch?v=DFYPw0x8Was

第3回ワークショップ
「話で人を引きつけよう」
講師：細田 家永氏

社会人基礎力の中の「前に踏み出す力」「チームで働く力」この2つに重点を置き、学ぶワークショップを開催した。1人のコンサルタント会社の新社会人になりきり、医薬品会社をコンサルし、会社に対して改善案を作成し、チームごとにプレゼンテーションするグループワークを実施した。第3回ワークショップ実施後、講師より実際に粗忽長屋（そこつながや）という落語の演目を披露していただきました。

講師 細田家永さん披露 粗忽長屋 YouTube配信URL
https://m.youtube.com/watch?v=Hw4iD8nvouY
第3回ワークショップYouTube配信URL
https://m.youtube.com/watch?v=5i7SqFAC9Uo

第4回ワークショップ
「実際に落語を見て、話の落ちを学ぼう」

4回目のワークショップは紅陵祭期間に講師、古今亭志ん彌さんに「子ほめ」という演目の落語の披露及び講師の細田家永さんと古今亭志ん彌さんとのディスカッションを実施した。ディスカッションでは、「学生のうちにしておくべきこと」「上司、先輩との上手なコミュニケーションの取り方とは」「インターネットとの向き合い方とは」「10年後の古典落語はどうなっているか」この4つの議題でお話していただいた。勉学に励むことと歌舞伎や落語を初めとした古典芸能を学割が効くうちに沢山観に行くことや、

古今亭志ん彌さん落語披露風景

挨拶、常に様々なことを学ぶという「志」という結論がでた。また、状況・場面は変わっていても人間の気持ちは変わらない。だからこそ面白く通じる。時代は変わっても人の気持ちは通じ合う。これは落語にも言えることであり、形態は変わる可能性はあるが落語の形式をとったものは10年後でもあり続ける。こういう時代だからこそ必要である。という結論が出た。

アンケートには、真打の落語家さんの落語を聞ける機会はなかなかないので良い経験になった、若いうちから伝統芸能に触れておくことの大切さがわかり、話のテンポが重要なことがわかった。話の構成の大切さや、ディスカッションでの上司との接し方の話がためになったなどの声があった。

第4回ワークショップ 真打古今亭志ん彌さん
落語披露YouTube配信URL
https://m.youtube.com/watch?v=6HJj4WYREOE
第4回ワークショップ
パネルディスカッションYouTube配信URL
https://m.youtube.com/watch?v=dSxv3l30znM

今回監査役兼アドバイザーとして本学落語研究会現OB会長である細田家永さん、講師に一般社団法人落語協会所属の真打落語家、古今亭志ん彌さん（本学OB）、吉本クリエーティブ・エージェンシー所属の漫才師である美波知治さん（本学OB）にご協力いただく予定でしたがスケジュールが合わず、講義内容のアドバイザーをしていただいた。講義に関しては、監査役兼アドバイザーである細田さんに講師としてご協力していただいた。

反省点など

学生チャレンジ企画の実施は大きな問題もなく成功したといえる。しかし、今後に向けての改善点もあると考える。1つ目は集客である。第1回目のワークショップの集客では、学生ホールへチラシを貼り、拓大ポータルでワークショップ実施のお知らせを流した。しかし大きな集客はなかった。第2回の実施に向け集客を伸ばすため宣伝のTwitterを作成し工夫をした。この試みにより第1回よりも参加人数が増加した。第3回に向けては引き続きTwitterを使用し企画メンバーによるチラシ配り、3年ゼミナール個別説明会での宣伝を実施。様々な工夫により、第1回から第3回と徐々に集客を伸ばすことが出来た。宣伝を続け、第4回ワークショップ（紅陵祭）では約70名の参加者が集まった。

2つ目はYouTubeの配信回数である。今回不特定多数の人に観てもらえるようワークショップ内容をYouTubeに映像配信していた。しかし、思うような再生回数に届かず再生回数に関しては企画終了後も改善していかなければならない大きな課題と考えている。

現時点では、Twitterでの宣伝や第4回ワークショップにご来場いただいた方への告知、拓殖大学Facebookでの紹介など改善案を実施し、より多くの方に観ていただけるよう試行錯誤している。

3つ目は、人数不足である。今回、紅陵祭での落語セットを落語研究会から借用する予定でしたがスケジュールの確認を怠り借用することが出来なくなってしまった。こういった状況で1人ひとりが自らのすべきことを考え、落語セットの調達やそのために空いた穴を埋める行動をとることが出来たが、人数不足による各メンバーのタスクの重さが目立った。しかし、このタスクの重さを乗り越え、責任感を持ち行動できたことは今後のゼミナール活動や社会人としての生活に生かしていけると感じた。このことから、次年度以降はプロジェクトに見合った人数を設定することでよりよいものになると考えた。

4つ目は、費用についてである。今回YouTubeへの動画のアップロードをスムーズに行うため業者への依頼を考えたが、企画に伴う技術のスキルアップのためメンバーで行うことをした。そのため大幅に奨励金が余り残金61,225円は大学に返金した。

収支報告

支出総額	148,775円	奨励金	210,000円

内訳 ［残金］¥61,225

項目		小計
消耗品	カメラ	¥66,914
消耗品	文房具（ペン、クリップボード、ホワイトボードマーカー、コピー用紙、スケッチブック、ファイル）	¥5,998
消耗品	ご祝儀袋・ポチ袋	¥410
消耗品	金屏風・毛氈	¥15,120
消耗品	滑り止めシート、マスキングテープ、ＰＰ綾巻、ガムテープ、カトレケース	¥1,512
消耗品	座布団代	¥8,254
消耗品	チラシコピー代	¥250
消耗品	Ａ４ボール紙、Ｂ５色画用紙、両面テープ、ラップ（紅陵祭で使用）	¥432
貸借費	畳（学祭 山王レンタル） 送料込み	¥4,320
交通費	タクシー代	¥1,540
交通費	ガソリン代	¥3,600
交通費	コインパーキング代	¥1,600
交通費	レンタカー代	¥7,514
会合費	紅陵祭 講師軽食	¥1,311
会合費	講師 交通費	¥30,000
	合計	¥148,775

▶ホームページ掲載

○**実施企画書**▶ http://gakuchalle.jp/2017/kikakusho.html
○**学チャレレポート**▶ http://gakuchalle.jp/2017/gakuchalle_tei.html

初めてのチャレンジ！今年こそチャレンジ！

How to Hunt a job in Japan!

～動画で伝える外国人留学生のための日本就活成功戦略ガイド～

団体名 **英米語学科 藤本ゼミナール**
代表者　外国語学部 英米語学科 3年 田中 希美
参加メンバー人数　10名

実施スケジュール

2017年7月2日～2018年1月9日

7月2日	アンケート調査実施
8月2日	孫 陽さん （商学部経営学科 2011年卒業） インタビュー
8月7日	ミーティング （途中経過報告と今後の予定について） 八王子
8月15日	リン シン イさん （国際学部国際学科 2015年卒業） インタビュー、インタビュー終了後ミーティング（浜松町）
8月24日	イエン モンさん （政経学部法律政治学科 2012年卒業） インタビュー、インタビュー終了後ミーティング（昭島）
1月9日	動画上映会 八王子国際キャンパス A304教室 参加者8名

パソコン室にて学生チャレンジの動画編集を行っている様子。役割分担をし、各自作業を進めました。

実施内容・成果

私たち藤本ゼミナールでは、日本で就職を希望する在日留学生および日本へ留学を希望する学生に、いち早く就職活動のシステムを理解してもらい、就職に対する不安や疑問を取り除き、日本での就職を促し、労働力不足の改善の一助となること目的としてこのプロジェクトを始めた。さらにこのプロジェクトを通じて、拓殖大学が留学生に対してサポート体制があることを国内外へアピールするとともに、拓殖大学を卒業し日本で就職した留学生と現役学生との架け橋を作り、孤立しやすい留学生のネットワークを広げることを促進したいとも考えた。

7月上旬、このプロジェクトを始める準備として、留学生は就職活動に対してどのような意見を持っているのかを把握するために本学在学中の留学生にアンケート調査をインターネット上で実施した。アンケート調査をスムーズに行ってもらうためにURLとQRコードを載せた用紙を配布してより多くの学生の意見を聞けるようにした。その結果、約６０人の学生から回答を得た。アンケート回答から、日本の文化が好きで日本で就職したいと考えている留学生が６割を占めていたことがわかった。そして、留学生は就職情報を得ているものの、半数以上の学生は日本の就職プロセスを理解できていないことも把握することができた。

語学サロンにて学生チャレンジについての取材。

このことから、今回の活動の必要性を感じた。このアンケートによって得た意見を参考にし、留学生の就職活動に関する不安や疑問をまとめ、企業にインタビューする際の質問を作成した。

上記のアンケートと同時進行で卒業生のリストを作成した。その際には拓殖大学就職部の方にご協力いただいた。そして２０名程度のリストの中でさらに出身地、業界を絞った。８月上旬にゼミのメンバーで手分けをしてインタビュー実施に向け様々な企業に電話をし、アポイントメントを取った。退職、異動、会社で対応できないなどの理由により、インタビューに対応していただけた企業は３社であった。しかしながら、インタビューとは別に用意した企業向けのアンケートには９月時点で２２社の企業から回答をいただき、さらに約１０社からの回答待ちであった。これにより企業が留学生の採用にあたり求めていることなどを知ることができた。この企業向けのアンケートから、企業は留学生に対して語学力を求めているとともに、積極性に溢れるコミュニケーション能力を求めていることが多いことを読み取ることができました。

８月中に各企業に日程を調整していただき、インタビューを行った。会社訪問をするのは初めての経験であり、緊張感を持ちながら行動した。企業の方からお話を伺ったことは留学生への情報提供のためだけではなく、私たちが就職活動する際にもとても役に立ち、貴重な経験となった。このプロジェクトで企業へインタビューやアンケートした結果から分かったことは、前文でも述べたように、コミュニケーション能力、忍耐強さ、チャレンジ精神が大切ということでした。これらを参考にしながら、動画編集を行った。

語学サロンにて今後の活動スケジュールについてミーティング。

株式会社フォスター電気にて、拓殖大学を卒業した留学生イエンモンさんにインタビューを行った。

反省点など

私たちはこの活動において、現役留学生の円滑な就職活動の促進をひとつの目標とした。そこで、留学生は就職活動にどのような疑問、不安を持っているのかを理解するために現役留学生へのアンケートを実施し、アンケートは約60人の方に答えてもらい、インタビュー時の質問の参考資料として活用した。

インタビューを実施していく上で苦労したことは、拓殖大学を卒業した留学生が働いている企業に連絡を取り、この企画の概要を一から説明しインタビューを受けてほしいという旨を伝えることだ。留学生が就職した企業に問い合わせてみると、すでに退職していたり、企業の様々な事情でインタビューを断られることも多かった。こういったこともあり、当初は10人程度の留学生の方たちにインタビューする予定だったが、結果としてインタビューをできた方は3人だった。私たちは就職部の方たちに協力してもらい、この3人の方たちとアポイントをとりインタビューを実施した。

こういった活動で動画を撮影するのは初めてのことだったので、留学生の動画を撮影する前に、撮影についてもっと詳しく勉強し、カメラのアングル調整などの工夫をしておけば良かったと思う。

２つ目の反省点は動画編集後の作業についてである。予定では9月中に動画の編集を開始したが、他言語の字幕を付けて編集するのは難しい状況であった。しかし、１０月中にメンバーが協力して作業を行い、1月9日に上映会を開催した。参加者からは「テーマに沿ってしっかりフォーカスしてたインタビュー内容だったから見てる方は理解しやすかった」、「留学生ではないが就活に役立った」との意見があった。

最後になりますが、この「How to Hunt a Job in Japan」に携わってくださった全ての関係者の方々に、心より感謝申し上げたいと思う。これからも私たちの後輩の手本となるようにご指導をいただきたいと思う。なお、実施する予定だったインタビューが3回になってしまった為残金が生じ、24,163円を大学に返金した。

収 支 報 告

支出総額	105,837円	奨 励 金	130,000円

内 訳　　［残金］¥24,163

項　目	小　計
交通費	¥50,960
会合費	¥3,650
消耗品費	¥51,227
合 計	¥105,837

▶ ホームページ掲載

○**実施企画書**▶ http://gakuchalle.jp/2017/kikakusho.html
○**学チャレレポート**▶ http://gakuchalle.jp/2017/gakuchalle_fujimoto.html

初めてのチャレンジ！今年こそチャレンジ！

2018年度 八王子市観光ブックプロジェクト

団体名 **関口ゼミナール**

代表者　外国語学部 中国語学科 4年 森下 雅洋

参加メンバー人数　9名

実施スケジュール

2017年5月中旬～2018年1月31日

5 月	日本語版、中国語版各500部を外部業者に委託して正式に印刷。 交換留学生の協力を得て、英語版の翻訳作業を進める。
5月下旬	ゼミで話し合った結果、学生チャレンジ企画への参加を決定。「新年度版観光ブックプロジェクト」を後期ゼミ活動に決定。
6月28日	学生チャレンジ企画の選考通過、「留学生向け八王子市観光ブックプロジェクト」を発展継続した形で「改訂版留学生向け八王子市観光ブックプロジェクト」発足。
8 月	英語版300部を外部業者に委託して正式に印刷。
8月以降	改訂版の取材、編集、翻訳作業に取り組んでいる。 紅陵祭で、日本語版、中国語版の改訂版（2018年度版）の見本誌を無料配布。
1月31日	印刷納品。

実施内容・成果

当初、拓殖大学外国語学部中国語学科の関口ゼミナールとして、拓殖大学の「語学力」と「国際力」を活かしゼミらしいことをしてみたい、就職活動、社会人という目の前の新たなステップを歩んでいく上での経験として、学生生活の中で、何か一つ目に見えるもの「形」を残したい。そんな気持ちで始まった企画がこの「留学生向け観光ブックプロジェクト」でした。

2016年9月、後期ゼミ活動として、前年度関口ゼミで自主的に行った「高尾山プロジェクト」の発展として、「留学生向け八王子市観光ブックプロジェクト」発足。当ゼミが自主的に取材・編集を行い、自主発行することを決定。以降毎週火曜日、詳しい観光地選定、編集方法などに関して会議を実施。

10月、JR高尾駅情報提供の協力を依頼。中央線の路線図などのデータを提供してもらった。

11月、JR高尾駅から、一般に発行する場合に各観光地に掲載許可が必要と指導される。

12月、八王子市役所観光課と打ち合わせを実施、当企画に対しての印象や展望、観光地の紹介、プロジェクトの継続許可などの確認。ゼミメンバーが観光地に出向き、取材、情報確認。

取材先、東京富士美術館での版画体験の様子。

12月、「八王子コンソーシアム」に参加し、見本版を展示。

1月～2月、各観光地に観光ブックの内容を再度確認してもらいレイアウトを見直し、訪日中国人留学生の協力のもと、中国語版を作成した。ゼミのプリンターで見本誌を印刷し、取材に協力いただいた観光地に見本誌を送付した。同時に、JR高尾駅に日本語版、中国語版の見本誌各30部を置かせてもらったところ、大変好評で、数日で配布を完了した。

当プロジェクトはひとまず終了。企画は一応、「単年企画」となり、継続するか否かは、後輩の決定によるとした。

2017年が始まり一番最初に決めたことは、「当ゼミの専門言語の中国語を使うこと」「写真撮影、掲載内容、編集構成、翻訳は学生が行うこと」「無料配布、非営利が前提のボランティア」といった大まかな計画だけだった。

実施日程の通り、トントン拍子で話しが進み、「先方への許可取り」「掲載方法」など様々な「学生ではなく、社会人としての自覚と意識とスキル」が必要であると実感させられる充実した内容へと進化していった。

八王子地域の活性化、訪日中国人や日本人観光客への八王子市の紹介、本学の宣伝、地域社会貢献などの期待される成果に応えるべく努力を続けた結果、日本語版、中国語版各500部の内、半数は協力していただいた観光地やJR高尾駅に置かせてもらえることとなった。JR高尾駅からは「好評なので追加でもってきてほしい。」との依頼の連絡が数回あった。またJR高尾駅でこの観光ブックを手に取った八王子中央図書館の職員の方から「図書館にも置かせてほしい」との電話があり、図書館にも置くことになった。

取材先に納品した後、1時間ほど取材先に滞在し、帰り際にパンフレット置き場を確認するとパンフレットが無くなっていた。自分たちがやっているこの企画は思いのほか大きなものになっていることに喜びとやりがいを感じた。

改訂版は、取材先を増やし、レイアウトも見直し、より留学生や観光客に喜んでもらえる観光パンフレットにするべく、ゼミ生一同協力して、作業を進めた。1月末に日本語版と中国語版を各300部、合計600部が完成。ＪＲ高尾駅に各250部、合計500部納品した。残りはご協力頂いた各観光地様に納品し、来年度の国際フェスティバルの展示で配布予定。

JR高尾駅、渡り廊下に作成したパンフレットが置かれている様子

8月30日、取材先道の駅滝山にてパンフレットが置かれている様子。

ゼミでの会議の様子。

反省点など

1. 全般的な下地づくりの失敗

2016年度ゼミで「留学生向け八王子市観光ブックプロジェクト」を発足させた際に、計画、役割分担、役職決めなどが疎かだった。そのため、会議で議論が滞ることが多かった。また、企画が進んだ2016年12月頃にJR高尾駅から「各観光地の写真や記事の掲載許可やあいさつ回り、アポ取り」などの基本がなっていないとの注意を受け、プロジェクトの根本的な見直しが必要になった。

2. ゼミ生の本プロジェクトに対する温度差

関口ゼミに所属している学生のうち、関口准教授が顧問を務める中国語会話愛好会に所属している学生が多く、後期のゼミ活動と愛好会の語劇祭への参加の両立が難しく、ゼミのみに参加している学生の負担が多くなってしまった。また、そもそもやる気のない学生もおり、作業中に何度も同じ説明をしなければならず、決められた作業の締切りを守らない学生がいるなど、ゼミ生間のプロジェクトに対する姿勢に温度差があり、作業が滞ったり、学生間に不公平感が広がり、団結して作業を進めることができず、ミスを誘発した。

3. 引継ぎの失敗

主体的にプロジェクトに参加していた学生が4年生で海外留学に参加し、残った4年生はゼミのプロジェクトに積極的に参加していなかった学生だったため、プロジェクトを継続していると言いつつも、詳しい作業の方法などが分からず、後輩への引継ぎがうまくいかなかった。昨年度と同じように詳しい会議の日程や、予算など、綿密な計画と写真などの記録を取るという意識や知識もなかった。

学生チャレンジ企画通過後、改めて企画を進めていく際に「昨年度の担当者の経験」を記録できていないことが発覚し、ほとんど昨年の経験を活かせないまま、3年生がアポ取り、取材許可などを一から行わなければならないことになった。

4. その他

「昨年度から継続している企画として実績がある」と学生チャレンジ企画発表会で報告をしたが、実は、各観光地などへの企画書の提出、取材や電話対応、編集などで、「新たに発見すること」が多く、もはや新規企画と同じように試行錯誤と失敗を繰り返しながら現在も進行している。

5. 今後について

今回、紅陵祭までに改訂版を作成するという当初の目標は大幅に軌道修正し、改訂版を2018年版として、なんとか3月までの完成を目指して、様々な点を反省し、進めていきたい。

また、本企画が来年度も続くかどうかは、資金のこともあり未定だが、他大学ではゼミで作成した観光冊子が、観光局などに認められ観光局のパンフレットとして発行されている事例もある。この企画がゼミ企画として継続、拡大していくことを目標にこれからも頑張っていきたい。

収支報告

支出総額	161,667円	奨励金	160,000円

内訳

項目		小計
交通費	電車 ¥980、タクシー ¥1,450、ガソリン ¥4,309 （電車費内訳）田園都市線 あざみ野～長津田 ¥200 JR横浜線 長津田～八王子 ¥390×2 タクシー 八王子駅～八王子道の駅滝山	¥6,739
雑費	東京富士美術館　入場料金	¥2,400
消耗品	インク（4色）	¥2,528
印刷費	（日本語版、中国語版、英語版）	¥150,000
	合計	¥161,667

▶ ホームページ掲載

○**実施企画書▶** http://gakuchalle.jp/2017/kikakusho.html

○**学チャレレポート▶** http://gakuchalle.jp/2017/gakuchalle_sekiguchi.html

初めてのチャレンジ!
今年こそチャレンジ!

ミュージックビデオで伝えるアフリカ

～アフリカの子供たちから拓大生と日本人が学ぶこと～

団体名 **拓殖大学アフリカ研究愛好会**
代表者　国際学部 国際学科 2年 榎本 悠人
参加メンバー人数　10名

実施スケジュール

2017年6月～2018年1月13日

6月、7月	ウガンダ、日本での活動内容 打ち合わせ
7月16日	映像作成、音楽について 打ち合わせ
8月1~7日	ウガンダで映像、音楽の撮影
9月8日	映像作成について 打ち合わせ 6名
10月14日	小学校訪問 ウガンダでの活動報告 5名
11月15日	小学校訪問② ミュージックビデオ撮影 2名
12月20日	仕上げた仮バージョンをウガンダに オンラインクラウドで送信
1月13日	豊玉南小学校で、 仮バージョンを放映

実施内容・成果

日本とウガンダの子どもたちの共同での映像作品制作を通して、国際交流の場を創出するとともに、今後さらなる発展が期待されるアフリカについて、拓大生をはじめとする多くの日本人にポジティブなイメージを伝えることを目標とし、この企画を考えました。

今回実際にアフリカのウガンダへ行き自分たちの目で子どもたちの笑顔や現地の生活、ウガンダの素晴らしい景色を見てくることで、日本にいては感じられないウガンダの素敵な部分をたくさん感じることができました。私たちが訪れた２つの小学校（Gulu town elementary school , St Maurirz elementary school）では、地域に伝わる伝統のダンスや楽器の演奏を見聴きしたり、音楽に合わせて歌っている姿を映像に収めたりすることもできました。子どもたちと一緒に遊び、同じ時間を過ごすことで、テレビや写真からだけでは感じることのできない等身大の彼らの姿を見ることができたと思います。

また、日本の小学生たちと意見交換や情報交換をすることで、小学生ならではのアイデアを得ることができ、私たちも驚くことや学ぶこと、気づかされることが多くありました。例えば動画のアイデアとして組体操のウェーブが出たので採用しました。さらに、小学校の先生方からもお茶碗を楽器として使用したらどうかという意見をいただきました。校長先生も自ら出演していただけました。保護者の方からも、『このような企画に子どもが参加できてうれしい』という声がありました。

日本の小学生たちと先生方が「ウガンダの子どもたちへ」と作成してくれたムービーをウガンダで流すことができました。これも私たちが望んでいた“子どもたちの視野を広げる経験”の1つになったと感じています。英語を話してみる、自分が被写体になってみる、などの小さな経験の一つ一つが子どもたちの将来に何かしら影響を与えてくれたらうれしいです。

実際に両国の子どもたちが会うことは難しいですが、私たちがその架け橋になることができたのではないかと思います。日本の小学生たちにウガンダで撮影してきた映像や音楽を聴いてもらった際も、子どもたちの明るい笑顔や楽しそうなダンスを見ることができました。

ミュージックビデオに関しては、ウガンダの素敵な景色や、両国の子どもたちの笑顔が詰まったものが完成しました。ウガンダからは、一部の生徒が見たという報告があり、豊玉南小学校では、参加してくれた六年生全員から「見ました！練習した成果があってよかった。」と言う意見もありました。豊玉南小学校校長先生からも「来年も何かやりたい」という言葉を貰い、次に繋がっていきそうです。ミュージックビデオ作成の際、スタジオでの音取りや映像撮影の様子など普段の生活では私たちもなかなか体験することができない体験を多くすることができ、映像制作の難しさを学ぶことができました。

ビクトリア湖 湖畔にて

グルで出会った子どもたち

グルの街並み

ウガンダ グルにて 歓迎のダンス

練馬区立豊玉南小学校にて

反省点など

日本のように何でも整っている場所と違い、アフリカという場所での活動はとても苦労しました。電気が無かったり、言葉が通じなかったり1つのシーンを撮影するにしても上手くいくことの方が少なく、チャレンジの連続でした。ウガンダの子どもたちが歌っているシーンを撮影するにしても、ウガンダの子どもたちはカメラを見るのも初めてです。その上、小学校での撮影であった為、周りには何百人という他の小学生がいます。そんな中で、緊張する子どもたちの笑顔を撮影することに苦労しました。また、ウガンダはアフリカタイムで物事が進みます。なかなか時間通りに物事が進まないのは当たり前で、限られたスケジュールの中で撮影することはとても大変でした。撮影期間を通して手伝ってくれた現地スタッフのガブリエルさんが、電話をしながらいろいろな調整をしてくれました。

反省点は２点あります。まずミュージックビデオに拓大生を出演させられなかったことです。このミュージックビデオ作成に当たり携わってくださったたくさんの方々や、私たち自身の思いをもう一度考え直し、現地の方や子どもたちの出演のみで作成することにしました。

もう1点は、参加したメンバー全員が満足にこの活動に携われなかったことです。団体で活動する上で全員が参加意識を持つということはとても大変なことですが、とても大切なことでもあると思います。メンバーの中で上手く情報共有ができなかったこと、参加意欲を持ち続けられなかったことは反省点であり、今後の課題です。

収支報告

支出総額　739,826円	奨励金　250,000円

内訳

項目		小計
交通費	航空券 ¥212,640×2名	¥425,280
交通費	現地移動費	¥114,500
宿泊費		¥160,000
会合費	現地スタッフ謝礼	¥6,213
消耗品	DVD	¥950
消耗品	写真	¥756
消耗品	変換プラグ	¥2,127
委託品	映像制作費	¥30,000
	合計	¥739,826

▶ホームページ掲載

○**実施企画書**▶ http://gakuchalle.jp/2017/kikakusho.html
○**学チャレレポート**▶ http://gakuchalle.jp/2017/gakuchalle_africa.html

初めてのチャレンジ！今年こそチャレンジ！

郷土料理を活用した地域ブランド創生プロジェクト

団体名 **徳永ゼミナールおよびデザイン学科チーム**
代表者　国際学部 国際学科 2年 丹澤 瑠里
参加メンバー人数　8名

実施スケジュール

2017年7月5日～9月24日

7月5日	事前打ち合わせ
7月8日～9日	第一回富士川町訪問 訪問先：つくたべかん 内　容：つくたべかんにてみみ作り体験
9月8日～10日	第二回富士川町訪問 訪問先：富士川町役場、富士川町民会館 内　容：町役場の方々と打ち合わせ、食生活改善委員会の川手素子さん他7名と試食会
9月23日～24日	第三回富士川町訪問 訪問先：富士川町民会館、道の駅「ふじかわ」 内　容：道の駅「ふじかわ」で試食会 時間：13:00～14:00 （無くなり次第終了）

「みみ」作り体験の様子

食生活改善委員様との合同試作品製作の様子

実施内容・成果

1回目の富士川町訪問では、「つくたべかん」というお店でみみの作り方を学びました。そして夏休みに先生を含むメンバー全員は、1人1品新しいみみ料理を考えてきました。

2回目の訪問では、食生活改善委員の皆様と一緒に意見を交わしながら新しいみみ料理を作りました。その後に試食会を開き、矢口ゼミナールの2年生数人も含めて全員で試食しながらおいしさや改善点などについて話し合い、以下の４品が試食会に提供する料理に決まりました。

写真①は「みみストローネ」です。この品はミネストローネにみみを入れた料理です。普通のみみとは違い洋風のみみになっています。

写真②は「なめとろみみ」です。この品はみみの持つ素材の柔らかさと絶妙な歯ごたえを最大限に生かすよう、なめこと山芋のとろろ汁で味付けしました。秋の風味とのど越しの良さが楽しめます。

写真③は「ゆずぽんみみ」です。この品は富士川町の特産物であるゆずを使ったぽん酢を使い、みみの上にねぎを添えた手軽な料理です。とてもさっぱりとしていてシンプルな味付けとなっています。

写真④は「黒蜜きなこみみ」です。この品はみみに黒蜜ときなこをまぶした和風スイーツです。シンプルかつ食感の良い料理です。

そして、私たちは工学部デザイン学科と協力して試食会で使うポスターと、新しいみみ料理の紹介する動画の作成を行いました。国際学部の学生では持っていないデザイン学科の知識を取り入れることで、見やすいポスターや視聴者にわかりやすい動画を作成することができました。

ポスターや動画制作にあたり、美味しさがそのまま伝わるように写真の加工や動画、ポスター編集を工夫しました。

9月24日に行った試食会では、道の駅「ふじかわ」を訪れた約80人の参加がありました。

私たちは1品につき100個ずつ提供し、50人の方がアンケートにご協力してくれました。

アンケート結果によると、全試作品の中でゆずぽんみみの印象が一番良く、老若男女問わず人気がありました。

2品目のなめとろみみはご年配の方々から特に人気がありました。

3品目のみみストローネと4品目の黒蜜きな粉みみは若い世代から多くの支持が得られました。

学生側が得られた成果

①フィールドワークの中で地方の現状理解
②問題に対する「解決法の立案」→
「現場で実践」の流れを体験

私達は本活動を通して「学生×地域」のつながりを作り、学生・地域ともに成果を得ることができました。

①フィールドワークの中で地方の現状理解

全3回の富士川町への訪問は、同町が抱える問題、町民の方々の考え、なにがこの町に必要とされているのかを確認・理解する機会となりました。今日において、富士川町では少子高齢化が第一課題となっています。そのような現状から、同町民の方々はさまざまな活動を通して同町の地域活性化に取り組んでいます。今回私たちは「郷土料理を活用した地域ブランド創生」を目標に掲げ活動しましたが、今後も私たちのような「若者」であり「よそ者」が、昔の考えに捉われない視点や斬新な考え方を、町の人々と共同で提案・実践することが、町の活性化を更に促進させるものになると思います。

②問題に対する「解決法の立案」→「現場で実践」の流れを体験

私たちは今回の学生チャレンジ企画を通して、目の前の課題に対する解決法を立案・計画したのち、実際に現場で実践し、その際また新たに確認された問題点を取り上げ、それを反省点としてチーム内で確認し、次の実践活動時に活かす、という流れを経験することが出来ました。このような経験は普段の大学生活における授業の中では得られないものであり、今後のゼミ活動だけでなく、その他の実践活動、あるいは社会で必ず役立つだろうと実感しました。

富士川町側が得られた成果

①町民の方々が富士川町・郷土料理を改めて見直す機会
②郷土料理の新しいカタチを発見

①町民の方々が富士川町・郷土料理を改めて見直す機会

上記で述べたように町民の人々は快く協力していただき、その中で郷土料理を改めて見直す機会になったとお話してくださいました。今回私たちが着目した富士川町郷土料理であるみみは、その存在を知っていても作る機会があまりないというほど、町内での認知度が薄いという課題がありました。この活動は郷土料理の地域ブランド化という町外へ向けた発信が目標の1つでありつつも、町民の人々がみみを再認知する機会にもなりました。

②郷土料理の新しいカタチを発見

私たちが郷土料理みみの新しい料理を考案したことにより、みみを活かしたさまざまなカタチを発見することができました。試食会を通して、みみはさまざまな味に合い、多様性のある食べ物だと知った、というご意見をいただきました。それは、みみが持つ特有の形や食感が、同じく山梨県の郷土料理であるほうとうとの差別化につながる糸口となりました。

以上が、私たちが学生チャレンジ企画を通して得られた成果としたいと思います。

私たちの考えた新しいみみ料理

①みみストローネ

②なめとろみみ

③ゆずぽんみみ

④黒蜜きなこみみ

反省点など

今回の活動での反省点は、事前準備が不十分であったことです。道の駅での試食会では、前日に必要な食材などを買って本番に備えました。しかし、試食会当日、仕込み作業で食材が足りなかったり、会場に運搬するための鍋が足りなかったりと、次々にトラブルが起こってしまいました。事前にしっかり確認しておけば防げていたようなものばかりでした。いままでのプレゼンや訪問先での活動がかなりスムーズに行えていて、少なからずそこで慢心していた部分もあったと思います。しかし、徳永先生や永見先生、富士川町在住の仙洞田さんの協力もあり、何とか無事に試食会を成功させることができました。綿密に計画を練ること、メンバーと話し合うことが大事であると学ぶことができました。

最後に、私たちの「郷土料理を活用した地域ブランド創生プロジェクト」に協力して下さったすべての関係者の皆さま、試食会にお越しいただいた多くの方々に厚くお礼、感謝申し上げます。皆さまのご協力により、私たちはこのような企画を成し遂げることができたと思います。

この活動は私たちの次の世代に引き継ぎ、富士川町発展に向けて新たな糸口からアプローチしていってほしいと思います。そして、私たち学生にとって富士川町という地がこれからも素晴らしいフィールドワークの場となるように、また“みみ”の商品化にむけて拓殖大学と富士川町の親睦をより深めていきたいと思います。今後ともご協力お願いします。

食生活改善委員様との試作品製作後の試食会の様子

道の駅「ふじかわ」での試食会

収支報告

支出総額　250,000円	奨励金　250,000円

内訳

項　目	小　計
交通費	¥104,250
材料費	¥44,556
宿泊費	¥78,500
施設利用料	¥12,996
印刷費	¥8,618
会合費　手みやげ	¥1,080
合計	¥250,000

▶ホームページ掲載

○**実施企画書**▶ http://gakuchalle.jp/2017/kikakusho.html
○**学チャレレポート**▶ http://gakuchalle.jp/2017/gakuchalle_tokunaga_design.html

成果報告発表会

優秀団体による成果報告発表会

グランプリ、準グランプリが決定！

12月2日(土)、文京キャンパスで優秀5団体による成果報告発表会が行われました。今年度の活動の集大成として10分間の発表、審査委員からの質疑応答で、活動の成果を報告しました。各団体の発表の後は、審査委員会を開催。芦田実行委員長は全体の講評で「審査の過程では、審査員の先生方からどの企画も甲乙つけがたい。あまり差がなかった」と、審査委員会の様子を振り返りました。最終結果は、グランプリに「拓殖大学アフリカ研究愛好会」、準グランプリに「徳永ゼミナールおよびデザイン学科チーム」が決定しました。

成果報告発表会での様子

グランプリ

拓殖大学アフリカ研究愛好会

ミュージックビデオで アフリカと日本をつなぐ！

委員長講評

拓大らしいチャレンジで地球の反対側のウガンダまで行った活動が評価されました。またウガンダに行っただけでなく、ウガンダの小学生の校長先生、現地のスタッフ、それから日本では、豊玉南小学校校長先生や保護者、児童の皆さんからも企画を認めてもらい、たくさんの方々を取りまとめて実行して行く力も素晴らしかったです。今回の活動で終わらず、引き続きウガンダと日本の懸け橋として活動していただきたいと思います。

代表挨拶

国際学部 国際学科 2年　代表　榎本 悠人

私たちの企画は、今日ここで終わりを告げるのではなく、完成したミュージックビデオをたくさんの人に観ていただき、アフリカの良さを伝えていくことを最終目標としています。これからも“終わりなき旅”は続いていくと思います。今回グランプリをいただいたことを糧に今後も頑張っていきたいと思います。

みなさんにとって学チャレとは?

○自分がアフリカに行くチャンスを得た場所です。
　自分の視野もとても広がり、自分を大きく成長できる場です。
○目的を明確にしてしっかりチャレンジできた場所だったと思っています。

準グランプリ

徳永ゼミナールおよびデザイン学科チーム

“みみ”を活かした地域活性化へ！

委員長講評

国際学部だけでなく、工学部と連携した学部横断的な取り組みが評価されました。また、町おこしに繋がっていく、活動の継続性にも期待が持てました。今後は、さらに富士川町の地元の方々との関わりを増やしていって欲しいと思います。

代表挨拶

国際学部 国際学科 2年 代表　丹澤 瑠里

活動を通じて、富士川町の町民の方々や役場の方々と交流をして、拓殖大学の学生と富士川町という繋がりが持てたこと。そして、この活動に積極的に協力して参加してくれた徳永ゼミの仲間と矢口ゼミナール、工学部デザイン学科の有志と一緒に活動して賞をいただけたことが本当にうれしく思います。ありがとうございました。

みなさんにとって学チャレとは?

○自分たちの活動の背中を押してくれる企画だと思います。
○学チャレと富士川町は、僕の青春です。
○いろいろな問題や事柄に目を向けられた良い機会だと思いました。他の団体の活動内容やプレゼンを聞いて、それぞれの事柄に向き合っていく人達がたくさんいることを知り、とても勉強になりました。
○学チャレのおかげで、私と“みみ”が出会ったと思います。No みみ,No lifeです！

優秀団体メンバー一覧

鄭偉ゼミナール チーム3年

商学部 経営学科	3年	石川 璃々亜	商学部 国際ビジネス学科	3年	川上 峻
商学部 経営学科	3年	大槻 睦美	商学部 国際ビジネス学科	3年	辻 拓巳
商学部 経営学科	3年	鈴木 夏帆	商学部 国際ビジネス学科	3年	永山 朱里
商学部 経営学科	3年	高橋 美玖	商学部 国際ビジネス学科	3年	吉田 龍平
商学部 経営学科	3年	野崎 新乃	政経学部 経済学科	3年	柴田 洸太郎
商学部 経営学科	3年	矢ノ下 萌佳			

関口ゼミナール

外国語学部 中国語学科	4年	内山 温志	外国語学部 中国語学科	3年	伊達 仁美
外国語学部 中国語学科	4年	高瀬 優樹	外国語学部 中国語学科	3年	松本 航
外国語学部 中国語学科	4年	森下 雅洋	外国語学部 中国語学科	3年	宮川 善暉
外国語学部 中国語学科	3年	木内 美穂	外国語学部 中国語学科	3年	留守 龍樹
外国語学部 中国語学科	3年	佐々木 聖美			

徳永ゼミナールおよびデザイン学科チーム

国際学部 国際学科	3年	敦沢 慶樹	国際学部 国際学科	2年	櫻井 世訓
国際学部 国際学科	3年	渡辺 誠也	国際学部 国際学科	2年	佐藤 光瑠
工学部 デザイン学科	3年	原 絵里子	国際学部 国際学科	2年	丹澤 瑠里
国際学部 国際学科	2年	大淵 裕介	国際学部 国際学科	2年	藺古田 瑠依

英米語学科 藤本ゼミナール

外国語学部 英米語学科	3年	石川 数馬	外国語学部 英米語学科	3年	出崎 芽惟
外国語学部 英米語学科	3年	伊藤 龍人	外国語学部 英米語学科	3年	パレデス・カズヒロ
外国語学部 英米語学科	3年	栗野 真衣	外国語学部 英米語学科	3年	保坂 日菜乃
外国語学部 英米語学科	3年	鈴木 裕規	外国語学部 英米語学科	3年	堀内 瞳
外国語学部 英米語学科	3年	田中 希実	外国語学部 英米語学科	3年	山下 加奈子

拓殖大学アフリカ研究愛好会

国際学部 国際学科	4年	佐藤 彩香	国際学部 国際学科	3年	丸山 智香
国際学部 国際学科	3年	岩田 由嘉子	国際学部 国際学科	2年	榎本 悠人
国際学部 国際学科	3年	植松 かなん	国際学部 国際学科	2年	櫻井 世訓
国際学部 国際学科	3年	川野 拓麻	国際学部 国際学科	1年	田中 まい
国際学部 国際学科	3年	小林 拓磨	国際学部 国際学科	1年	中川 亜美